

日時：2010年10月15日(金) 13時30分～18時

会場：東京ウィメンズプラザ
東京都渋谷区神宮前5-53-67

水は誰のモノ？

公平と循環を両立するために



今、水ビジネスが大きな関心を集めています。地域の水循環の一部を担い、社会資本である水道事業においても、市場メカニズムと公共制度をどのように組み合わせれば利用者の公平と循環が両立されるのかが、解かれぬ問題として立ち現れています。

共有的な資源であり、「みんなのもの」であるはずの水。しかし現実には、水事業を持続的に運営するために、誰がどのように費用を負担し、どのような利用権が与えられればよいのでしょうか。

人口爆発が続く世界にも、人口減少が本格化する日本にも、「公平と循環を両立できる水事業」を可能とする水文化の構築が求められています。

本フォーラムでは、さまざま水文化の視点から「公平と循環を両立できる水事業」について討議します。

写真は昨年開催された、ミツカン水の文化交流フォーラム2009。
於：東京ウィメンズプラザ。

夏休み、子供たちと一緒に
ご利用ください

水探検ワークブック

『大切な水を探検』

—もしも蛇口が止まったら？—

当センターが作成した水のワークブック(小学生向け)です。詳細は事務局までお問い合わせください。

もしも蛇口が止まったら？
みんなで水を上手に使おう

大切な水を探検



みんなのまじやぶらの
水を探そう

ミツカン水の文化センター

問題提起

健全な地下水循環への取り組み 熊本県の事例から

小嶋 一誠 前熊本県環境生活部水環境課課長

日本と世界の水ビジネス 現状と将来

中村吉明 独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) 研究開発推進部長

途上国の水道事情 開発援助の現場から

橋本和司 八千代エンジニアリング株式会社国際事業本部顧問

水資源は誰のモノ？ 水法の観点から

宮崎 淳 創価大学法学部教授

※氏名五十音順、敬称略

討論

公平と循環を両立する水事業と水文化とは

コーディネーター：沖大幹 東京大学生産技術研究所教授

登壇者：小嶋一誠、中村吉明、橋本和司、宮崎 淳

なお、プログラムは予告なく変更する場合がございます。あらかじめご了承ください。
本フォーラムへの参加申込は、2010年9月1日(水)より、
ホームページ (<http://www.mizu.gr.jp>) にて受付を開始します。

■水の文化36号予告

特集「愛知用水」(仮)

2011年、愛知用水は通水を開始して50年。地元民の発案を世銀融資で実現し、愛知県東部地域を戦後復興から高度成長期に移行させたナショナルプロジェクトでした。次号では愛知用水事業を題材に、高度成長期の流域開発とは何だったのかについて考えます。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

編集後記

◆ 今回より参画させていただくことに！ 今皆さんの議論を聞くのみ。アクアトリズムって何？ と思いつながら言葉の響きの心地よさに幼きころ、尾張の田舎の川で遊んでいた風景を思い出していました(現実逃避か...)。(宮)

◆ 高速での移動手段がない時代、目的地までの道中そのものが旅であり、楽しみであったはず。時間をかけてその土地の風土や風景、風味に触れ、その土地の価値を実感する。道中を楽しむ暇がない現代において、水の流れは緩やかであり、トリズムに相応しい素材と思うが...。(新)

◆ 都会っ子の私。正直、水資源について真剣に考えたことがなかった。今回水源地を訪れ、そこで暮らす方々と交流してから、端切れで拭いてから食器を洗うように。「相手の顔を知る」トリズムの可能性を感じた取材だった。(松)

◆ 高校の修学旅行以来二度目の阿蘇。熊本城と草千里の記憶だけが残る。熊本がこれほど豊かな水文化を持っているという説明は聞いた記憶がない。日本の歴史観光もさることながら、水文化に触れる旅があってもよいのではないか。(ゆ)

◆ エコトリズム、アクアトリズム...。今度はアクアトリズムか？ と言われるかもしれないが、水循環もたらす経済的・社会的な波及効果は「移動者の世界」に対しても予想以上に大きいのではないか。熊本のカースを読んで実感した。(中)

◆ 水は、時には命を育み、時には命を脅かす。そんな水が媒介になってつながった人々が暮らす地域には、命の鼓動が聞こえるようなエネルギーが感じられる。アクアトリズムとは、こうしたエネルギーを吸収する「パワースポット巡り」なのかもしれない。(緒)

◆ また訪れたいという場所はよくあるが、住みたいと思わせるところはなかなかない。熊本はそんな魅力を持ったところだった。もともと恵まれた自然環境が備わっているが、それを磨き上げた人の手が生み出した魅力ではないだろうか。(力)

◆ 日本全国(たまに海外も)、取材先は水にかかわりのあるところばかり。編集部の仕事は、まさにアクアトリズムの積み重ねだ。各地で出会う人たちの層の厚さに、日本もまだ捨てたもんじゃない、と希望が湧いてくる。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第35号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複写

発行日 2010年(平成22年)6月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集制作 宮崎真次 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 中庭光彦
緒方大輔 原田朱野 賀川一枝 中野公力 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中埜ビル9F
株式会社ミツカングループ本社 広報室内
Tel. 03(3555)2607 Fax. 03(3297)8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局

〒104-0043 東京都中央区湊1-13-2 アリス・マナーガーデン11F
Tel. 03(3552)7504 Fax. 03(3552)7506